

赤い星は如何にして昇ったか

石川慎浩著 (臨川書店・3240円)

1936年、ペールに包まれていた中国共産党の指導者たちの素顔に接し、中でも毛沢東の半生に関する自伝を聞き出して初めて世に伝えたのは、アメリカ人ジャーナリストのエドガー・スノーだった。取材の成果をまとめた『中国の赤い星』はベストセラーとなった。本書は、大スクープが成立した事情を検証するとともに、『中国の赤い星』刊行以前にさかのぼって、毛という人物のイメージがどのように形成されたかを詳細に明らかにした。

日本の外務省が37年、官報の付録に掲載した毛のものとされる写真が

最初に掲げられているが、これが全く別人のもの。なぜか。謎を解き明かしつつ、当時、欧米や日本で流通していた毛や朱徳らの画像を検討していく。その過程がスリリングで面白い。中国共産党が国民党との内戦や合作を繰り返し、海外では毛に関する情報も限られていた時期、1枚の写真がいかに貴重だったか、それゆえに同じ画像がどれほど使い回されていたかが分かる。

著者は中国近現代史を専攻する京都大学教授。堅実に積み重ねられた研究に基づく労作でありながら、叙述は軽妙で、楽しく読める。(書)